オーケストラ・アンサンブル金沢

2020年

7月

定期公演

Orchestra Ensemble Kanazawa
Subscription Concerts in July 2020

当公演は新型コロナウイルス感染症
拡大防止の為、中止となりました。

オーケストラ・アンサンブル金沢
Orchestra Ensemble Kanazawa

1988年、岩城宏之が創設音楽監督（永久名誉音楽監督）を務め、多くの外国人を含む40名からなる日本最初のプロの室内オーケストラとして石川県と金沢市が設立。JR金沢駅兼六園口に建つ石川県立音楽堂を本拠地とし、北陸、東京、大阪、名古屋での定期公演など年間約100公演を行っている。シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭への4度の招聘など、これまで20回の海外公演を実施。設立時よりコンポーザー・イン・レジデンス（現コンポーザー・オブ・ザ・イヤー）制を実施、多くの委嘱作品を初演、CD化している。ジュニアの指導、学生との共演、邦楽との共同制作などオーケストラ育成・普及活動にも積極的に取り組んでいる。ドイツ・グラモフォン、ワーナーミュージック・ジャパン、エイベックス・クラシックスなどメジャーレーベルより90枚を超えるCDを発売。2007年より井上道義が音楽監督（～2018年3月末）を務め、18年9月よりマルク・ミンコフスキが芸術監督を務める。　オフィシャル・サイト　http://www.oek.jp/

Orchestra Ensemble Kanazawa is one of the most active chamber orchestra in Japan, founded in 1988 by the initiative of renowned conductor Hiroyuki Iwaki, and based in Kanazawa symbolizing Japanese art, culture and tradition. OEK has over 100 concerts a year in all major cities through out Japan, and regularly performs abroad. Although programme building is based on classical repertoire, great emphasis is put on interpretation of contemporary music. Over 90 CDs are released from Japanese major label. Michiyoshi Inoue was engaged as the Music Director of the OEK in 2007 (~March 2018). In September 2018, Marc Minkowski became the Artistic Chef.　Official site ; http://www.oek.jp/

コンポーザー・オブ・ザ・イヤー（2009年までコンポーザー・イン・レジデンス）

一柳　慧 (1988～1991)
石井眞木 (1988～1991 2003 4月†)
外山雄三 (1991～1992)
西村　朗 (1992～1993)
湯浅譲二 (1993～1995)
武満　徹 (1995～1996 2月†)
黛　敏郎 (1996～1997 4月†)
池辺晋一郎 (1997～1998)
藤家溪子 (1998～1999)
林　　光 (1999～2000 2012 1月†)
江村哲二 (2000～2001 2007 6月†)
松村禎三 (2001～2002 2007 8月†)
三善　晃 (2002～2003 2013 10月†)
猿谷紀郎 (2003～2004)
権代敦彦 (2004～2005)
レーラ・アウエルバッハ (2004～2005)
間宮芳生 (2005～2006)
新実徳英 (2006～2007)
一柳　慧 (2007～2008)
三枝成彰 (2008～2009)
ロジェ・ブトリー (2009～2010 2019 9月†)
加古　隆 (2010～2011)
望月　京 (2011～2012)
陳　銀淑 (2012～2014)
権代敦彦 (2014～2015)
一柳　慧 (2015～2016)
ティエリー・エスケシュ (2016～2017)
池辺晋一郎 (2017～2018)
挾間美帆 (2018～2019)
酒井健治 (2019～2020)

第430回 定期公演 マイスター・シリーズ

2020年7月4日(土) 14:00開演　石川県立音楽堂コンサートホール

The 430th Subscription Concert / Meister-Serie
Saturday, 4 July 2020 at 2PM / Ishikawa Ongakudo Concert Hall

指揮 Conductor ● ダニエーレ・ルスティオーニ
Daniele Rustioni

ヴァイオリン Violin ● フランチェスカ・デゴ
Francesca Dego

主催：公益財団法人 石川県音楽文化振興事業団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人 日本芸術文化振興会

ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven

序曲「コリオラン」op.62
Coriolan, Overture op.62

モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

ヴァイオリン協奏曲 第2番 ニ長調 K.211
Violin Concerto No.2 in D major, K.211

第1楽章　アレグロ・モデラート
Allegro moderato

第2楽章　アンダンテ
Andante

第3楽章　ロンド、アレグロ
Rondo, Allegro

休憩 / Intermission

ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven

バレエ音楽「プロメテウスの創造物」序曲 op.43
The Creatures of Prometheus, Overture op.43

モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

交響曲 第38番 ニ長調「プラハ」K.504
Symphony No.38 in D major, K.504 "Prague"

第1楽章　アダージョ～アレグロ
Adagio-Allegro

第2楽章　アンダンテ
Andante

第3楽章　プレスト
Presto

7/4

指揮
ダニエーレ・ルスティオーニ

Conductor
Daniele Rustioni

© Davide Cerati

同世代で、オペラと交響曲を演奏する魅力的な若き指揮者の一人。2017年9月より国立リヨン歌劇場の首席指揮者、2019シーズンよりアルスター管弦楽団の首席指揮者、2011年よりトスカーナ管弦楽団の首席指揮者を務める。多才な指揮者として世界中で活躍し、2019年1月、インディアナポリス交響楽団でアメリカのオーケストラ指揮デビュー。イタリアの主要オーケストラ、ロンドン・フィル、ハレ管弦楽団とも定期的に共演。2014年東京二期会オペラ劇場『蝶々夫人』に出演して以来、定期的に日本で演奏を行い、九州交響楽団、東京交響楽団、大阪フィル、東京都交響楽団と共演している。2013年「インターナショナル・オペラ・アワード」年間最優秀新人賞を受賞。

公式WEBサイト　www.danielerustioni.com

Daniele Rustioni is one of the most compelling conductors of both opera and symphonic works of his generation. Principal Conductor of Opéra National de Lyon since September 2017 he is at the helm of the Ulster Orchestra in the UK as Chief Conductor starting from this season 2019/20. He is also the Principal Conductor of the Orchestra della Toscana, a position he has held since 2011.

He is in-demand worldwide as a versatile conductor of symphonic music. In January 2019, Maestro Rustioni made his American orchestral conducting debut with the Indianapolis Symphony Orchestra. He has conducted all major Italian symphony orchestras and is a regular guest of the London Philharmonic Orchestra and of the Hallé Orchestra in the UK.

He has made regular appearances in Japan since his debut conducting Madama Butterfly at the Nikkikai Opera in 2014, including performances with the Kyushu Symphony Orchestra, Tokyo Symphony Orchestra, Osaka Philharmonic and the Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra.

In 2013 Daniele Rustioni received the International Opera Award for Best Newcomer of the Year.

Official WEB site : www.danielerustioni.com

7/4

ヴァイオリン
フランチェスカ・デゴ

© Davide Cerati

Violin
Francesca Dego

2008年、イタリア人女性として初めてパガニーニ国際ヴァイオリン・コンクールで入賞し、世界的な注目を浴びる。2012年に名門ドイツ・グラモフォンと契約し、最新盤『イタリア組曲』を含むアルバムはいずれも高評を得る。これまでに、フィルハーモニア管、ハレ管、バーミンガム市響、ケルン・ギュルツェニヒ管、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ交響楽団等のオーケストラと、サー・ロジャー・ノリントン、ディエゴ・マテウス、クリストファー・ホグウッド等の指揮者と共演している。使用楽器は、フランチェスコ・ルジェーリ（1697年製）。

Francesca Dego attracted widespread attention for being the first Italian female prize-winner of the Paganini Competition in 2008. Signed in 2012 by Deutsche Grammophon, all albums including the most recent recording “Suite Italienne” have been highly acclaimed. She regularly appears with major orchestras such as the Philharmonia Orchestra, Hallé Orchestra, City of Birmingham Symphony Orchestra, Gürzenich Orchestra Cologne, and Orchestra Sinfonica di Milano Giuseppe Verdi under the baton of Sir Roger Norrington, Diego Matheuz, Christopher Hogwood. She plays on a precious Francesco Ruggeri violin (Cremona 1697).

飯尾 洋一　音楽ジャーナリスト

ベートーヴェンとモーツァルト

ウィーン古典派を代表する作曲家といえば、モーツァルト、ベートーヴェン、ハイドンの3人。モーツァルトはハイドンを偉大な先人として慕っていた。一方、ベートーヴェンにとってハイドンは若き日の師にあたる。ではモーツァルトとベートーヴェンの関係は？

古くから伝えられるところによれば、16歳のベートーヴェンがウィーンを訪れた際、モーツァルトに会って卓越した即興演奏を披露して、その非凡な才能を印象付けたという。ただ、はっきりとした記録があるわけではなく、本当に会ったかどうかはなんとも言えない。多忙だったモーツァルトが無名の少年に会うなどということがあるだろうか。いかにも後から作られた伝説という感はある。かといって、「ありそうにない話」だから、なかったと結論付けるのもおかしな話で、真実はわからない。

ただ、ベートーヴェンはモーツァルトのピアノを聴くことはできたようだ。後に弟子のチェルニーに対して、「モーツァルトの演奏はすばらしかったが、音と音が途切れていて、レガートではなかった」と語っている。

少なくとも、ベートーヴェンとモーツァルトが同じ空間にいたことはある、と言うことはできるだろう。

ベートーヴェン
序曲「コリオラン」op.62

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が、友人であったウィーンの宮廷秘書官であり劇作家のハインリヒ・ヨーゼフ・フォン・コリンの同名戯曲に触発されて書いた序曲。「コリオラン」とは古代ローマの英雄コリオラヌスを指す。戦功をあげたにもかかわらずローマから追放されたコリオラヌスは、憤慨して敵軍と手を結びローマへと攻め込むものの、母と妻に懇願されて和平を結び、やがて謀殺される。

作曲は1807年。同時期に書かれた交響曲第5番「運命」と同じくハ短調で書かれ、緊迫感あふれる悲劇的な曲想も共通する。コリオランの野心的な性格をあらわす第一主題と、穏やかな第二主題がコントラストを描く。最後は息絶えるかのように弦楽器のピッツィカートで静かに曲を閉じる。

モーツァルト
ヴァイオリン協奏曲 第2番 ニ長調 K.211

かつて、多くの作曲家はステージに立つ演奏家でもあった。たとえばベートーヴェンはまず新進気鋭のピアニストとして注目を集め、それから作曲家としての声望を高めた。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）もまた名ピアニストとしてウィーンを席巻した作曲家である。ただ、彼が他の作曲家と異なるのは、名ピアニストであるよりも前にヴァイオリニストとして活躍していたという点だろう。故郷ザルツブルクでのモーツァルトの職務は宮廷楽団のヴァイオリニスト。ただし、本人がなりたかったのはヴァイオリニストでは

なく、ピアニストだ。後に音楽の都ウィーンへと移ってからはもっぱらピアニストとして活動することになった。したがって、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲は、いずれもまだザルツブルクに留まっていた十代の頃に集中的に書かれている。

ヴァイオリン協奏曲第2番が作曲されたのは1775年、モーツァルト19歳の年。この年の6月から12月にかけて、半年間でモーツァルトは4曲のヴァイオリン協奏曲を書いており、その最初の作品がこの曲である。宮廷楽団のコンサートマスターを務めていたモーツァルトが自ら独奏を務めるために書いたと推測されるが、初演の記録は残っていない。

第1楽章　アレグロ・モデラート　晴朗でエレガントな趣味がにじみ出ている。フランス風のギャラントなスタイルと呼ぶべきか。

第2楽章　アンダンテ　穏やかで抒情的な緩徐楽章。ヒロインが歌うオペラの一場面のよう。

第3楽章　ロンド、アレグロ　ロンド形式によるフィナーレ。ロンド部分はフランス流のメヌエット。典雅な踊りの音楽が澄ました調子で奏でられる。

ベートーヴェン
バレエ音楽「プロメテウスの創造物」序曲 op.43

ベートーヴェンにとって数少ないバレエ音楽のひとつが「プロメテウスの創造物」。作曲は1800年から01年。交響曲第1番と交響曲第2番の間に位置する作品である。

バレエの台本は当時ヨーロッパ随一の名声を誇った舞踊家サルヴァトーレ・ヴィガーノによる。作曲家ルイージ・ボッケリーニを叔父に持つ高名な舞踊家であったヴィガーノは、1793年にウィーンでバレエ公演を行ない、その後、プラハやヴェネツィアを拠点に活躍した後、1799年にウィーンを再訪して宮廷バレエ・マイスターに就任した。ヴィガーノはギリシャ神話のプロ

メテウスを題材とした台本を書きあげ、その音楽をベートーヴェンに依頼した。

「プロメテウスの創造物」は1801年の初演から翌年までの間にウィーンで20回以上も上演されたというから、かなりの成功作といってよいだろう。振付けの詳細は失われてしまったが、ヴィガーノの没後に出版された記録によれば、以下のような筋立てを持つ。

プロメテウスは泥と水から最初の人間の男女を作り、天上の炎を盗んで人形に命を与えた。人形は動き出すが、その粗野なふるまいにプロメテウスは失望する。プロメテウスは人形たちをアポロとミューズの住むパルナッソス山へ連れ出す。神々が人形に音楽や舞踊、悲劇や喜劇を教え、プロメテウスの創造物は完全な人間となった。

序曲はコンサートでしばしば演奏される人気作。ゆったりとした序奏で開始され、やがて躍動感あふれるアレグロの主部へと突入する。幕開けの音楽にふさわしい快活さを持つ。

モーツァルト
交響曲 第38番 ニ長調「プラハ」K.504

傑作ぞろいのモーツァルトの後期の交響曲にあって、ひときわ輝かしい幸福感にあふれた作品が、この交響曲第38番「プラハ」である。そのまばゆいばかりの光彩に、オペラ「フィガロの結婚」と同様の雰囲気を感じる方も多いのではないだろうか。

1787年1月、プラハの街ではウィーンを上回るモーツァルト旋風が巻き起こっていた。前年のオペラ「フィガロの結婚」の大成功を受けてモーツァルトはプラハへと向かった。モーツァルトは友人に宛てた手紙に、こう記している。「ここでは話題といえばフィガロばかり。ほかのオペラなんかには目もくれず、明けても暮れてもフィガロ、フィガロ」。自信満々の作曲家の姿が目に浮かぶ。

プラハ旅行では「フィガロの結婚」の上演に加えて、モーツァルトの公開演奏会が開かれた。交響曲第38番「プラハ」はこの演奏会で披露されたとものと考えられる。モーツァルトはプラハの熱狂的な聴衆に歓待され、さらに新作オペラの依頼を受けて、これが同年秋の「ドン・ジョヴァンニ」上演へと結実した。プラハでの充実ぶりはこの交響曲からも連想できるだろう。

曲は3つの楽章からなる。通常なら第3楽章に置かれるメヌエット楽章を欠いた、急―緩―急の構成となっている。

第1楽章　アダージョ～アレグロ　入念でドラマティックな序奏に、明るく生気にあふれた主部が続く。

第2楽章　アンダンテ　しなやかで陰影に富んだ楽想がくりひろげられる。淡々とした調子のなかにもほのかな哀愁が漂う。

第3楽章　プレスト　茶目っ気のある活発な主題がエネルギッシュな高揚感を生み出す。壮麗なフィナーレ。

第431回 定期公演 フィルハーモニー・シリーズ

2020年7月16日(木) 19:00開演　石川県立音楽堂コンサートホール

The 431st Subscription Concert / Philharmonie-Serie
Thursday, 16 July 2020 at 7PM / Ishikawa Ongakudo Concert Hall

指揮 Conductor ● 川瀬 賢太郎 Kentaro Kawase

ピアノ Piano ● 菊池 洋子 Yoko Kikuchi

主催：公益財団法人 石川県音楽文化振興事業団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人 日本芸術文化振興会

細川俊夫
Toshio Hosokawa

月夜の蓮 − モーツァルトへのオマージュ(2006)
Lotus under the Moonlight - Hommage à Mozart (2006)

モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488
Piano Concerto No.23 in A major, K.488

第1楽章　アレグロ　Allegro

第2楽章　アダージョ　Adagio

第3楽章　アレグロ・アッサイ　Allegro assai

休憩 / Intermission

モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

〈オペラ序曲集〉
“Opera Overtures”

歌劇「偽りの女庭師」K.196　La finta giardiniera, K.196

歌劇「羊飼いの王様」K.208　Il rè pastore, K.208

歌劇「イドメネオ」K.366　Idomeneo, K.366

歌劇「劇場支配人」K.486　Die Schauspieldirektor, K.486

歌劇「フィガロの結婚」K.492　Le nozze di Figaro, K.492

歌劇「コジ・ファン・トゥッテ」K.588　Così fan tutte, K.588

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」K.527　Don Giovanni, K.527

7/16

指揮
川瀬 賢太郎

Conductor
Kentaro Kawase

© Yoshinori Kurosawa

84年東京生まれ。07年東京音楽大学音楽学部音楽学科作曲指揮専攻（指揮）を卒業。指揮を広上淳一、汐澤安彦等各氏に師事。06年東京国際音楽コンクール〈指揮〉において1位なしの2位（最高位）に入賞。以来各地のオーケストラから次々に招きを受ける。また近年、細川俊夫「リアの物語」やモーツァルト「フィガロの結婚」「後宮からの逃走」「魔笛」、ヴェルディ「アイーダ」等を指揮、オーケストラ公演のみならずオペラでも注目を集める俊英。

現在、神奈川フィル常任指揮者、名古屋フィル正指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢パーマネント・ゲストコンダクター（常任客演指揮者）、八王子ユースオーケストラ音楽監督を務める。三重県いなべ市親善大使。15年「渡邉暁雄音楽基金」音楽賞受賞、第64回神奈川文化賞未来賞を受賞。16年第14回 齋藤秀雄メモリアル基金賞、第26回「出光

Born in Tokyo in 1984 and graduated with a degree in conducting from the Tokyo College of Music in 2007, having studied under Junichi Hirokami, Yasuhiko Shiozawa and others. Was awarded 2nd place (which was the highest level with no 1st place) at the Tokyo International Music Competition for Conducting in 2006, and since then Kawase has received numerous invitations from orchestras near and far. In recent years, he has conducted the likes of Toshio Hosokawa's "Vision of Lear", Mozart's "Le Nozze di Figaro", "Die Entführung aus dem Serail" and "Die Zauberflöte", and Verdi's "Aida". Kawase has distinguished himself in garnering attention not only for orchestral but also for operatic performances.

Kawase is presently the permanent conductor of the Kanagawa Philharmonic Orchestra, the conductor of the Nagoya Philharmonic Orchestra, the permanent guest conductor of Orchestra Ensemble Kanazawa, and the music director of the Hachioji Youth Orchestra. He is also a goodwill ambassador for Inabe City in Mie Prefecture, and in 2015 received a music award from the WATANABE Akeo Music Foundation. He also received the 'Future Award' at the 64th Kanagawa Cultural Awards, and was further awarded in 2016 at the 14th Hideo Saito Memorial Fund Award, the

音楽賞」、横浜文化賞 文化・芸術奨励賞を受賞。東京音楽大学作曲指揮専攻（指揮）特任講師。

26th 'Idemitsu Music Award', and additionally received an award for encouragement at the Yokohama Cultural Awards. Kawase is a special lecturer in conducting at the Tokyo College of Music.

7/16

ピアノ
菊池 洋子

Piano
Yoko Kikuchi

© Marco Borggreve

2002年第8回モーツァルト国際コンクールにおいて日本人として初めて優勝。その後、ザルツブルク音楽祭のモーツァルト・マチネに出演するほか、国内外で活発に活動を展開。これまで、国内の主要オーケストラとの共演はもとより、国際的にもリサイタル、オーケストラとの共演、室内楽演奏会で成功を収めている。

2009、2018年にモーツァルトのピアノ・ソナタ全曲をフォルテピアノとモダンピアノを用いて演奏するといった意欲的な企画に取り組み好評を得た。CD録音も活発に行い、エイベックスとオクタヴィアよりリリースしている。2007年第17回出光音楽賞受賞。

First Japanese winner of the International Mozart Competition. She has since been active both in the international and domestic fields, including her appearance in the Mozart Matinee at the Salzburg Festival, with an excellent reputation for her complete Mozart piano sonatas concerts held in 2009 and 2018. The CDs are released by Avex and Octavia. Yoko also won the 17th Idemitsu Music Award.

飯尾 洋一　音楽ジャーナリスト

先日、フランスの名ピアニスト、アンヌ・ケフェレックが「モーツァルトのピアノ協奏曲はすべて、オペラの翻訳だ」と語っていた。なるほどと膝を打つ方も多いのでは。おそらくピアノ協奏曲に限らず、多くのモーツァルトの器楽曲について同じことが言えるだろう。モーツァルトは本質的に劇場の作曲家であり、その創作の中心にオペラが位置していた。

器楽曲であっても、その音楽の背景にはひそかにオペラが進行している。それは歌われるべき音楽であり、個性豊かな登場人物がそろった物語の音楽でもあるのだ。

細川俊夫
月夜の蓮 － モーツァルトへのオマージュ（2006）

モーツァルトの生誕250年を祝って、北ドイツ放送により委嘱された。モーツァルトのピアノ協奏曲から作曲者が一曲選択し、それと同じ編成で曲を書くというリクエストに対して、選ばれたのはピアノ協奏曲第23番。その第2楽章嬰ヘ短調が題材とされた。世界初演は2006年4月7日、ハンブルクにて。児玉桃のピアノ、準・メルクル指揮北ドイツ放送交響楽団による。

作曲者によれば「蓮の花はピアノであり、オーケストラは水と自然を象徴する」。嬰ヘ音を中心とする持続音が水面に見立てられ、低音が水中を、高音が水上に広がる空間を暗示する。蓮は東洋の仏教世界を代表する花であり、西洋音楽のシンボルともいえるモーツァルトとの対比を読み取ることも可能だろう。

モーツァルト
ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488

1786年、ウィーンで時代の寵児として絶大な人気を誇っていたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756 ～ 1791）は30歳を迎えた。この年の5月には彼の代表作ともいえる傑作オペラ「フィガロの結婚」が初演されている。「フィガロの結婚」初演を前に、3月2日、モーツァルトはピアノ協奏曲第23番イ長調を書きあげた。同時期に書かれただけあって、ピアノ協奏曲第23番にはどこか「フィガロの結婚」にも通じるような、絶頂期の創作者ならではの筆の勢いと伸びやかさが感じられる。

この曲はおそらくピアノ協奏曲第22番および第24番とともに、四旬節の演奏会のために作曲されたとみなされている。モーツァルトはフュルステンベルク侯にこれらの作品を売り込む際、いずれも自分のために、または愛好家の小さなサークルのために書いたものであり、まだウィーンでさえ知られていない曲だと手紙に記している。楽譜が出版されたのは、作曲者の死後になってから。以来、傑作ぞろいのモーツァルトのピアノ協奏曲のなかでも屈指の人気を誇る。

オーケストラの編成にオーボエを欠き、代わって当時まだ新興楽器であったクラリネットが使用されているのが目をひく。トランペットとティンパニを欠くのもこの時期のピアノ協奏曲では珍しい。

第1楽章　アレグロ　オーケストラがしなやかで優美な主題を奏で、これに独奏ピアノが応答する。

第2楽章　アダージョ　前楽章から一転して、嘆きの歌が陰影豊かに綴られる。引きずるようなシチリアーノのリズムが特徴的。

第3楽章　アレグロ・アッサイ　溌剌とした楽天的なフィナーレ。喜びを爆発させる。

モーツァルト
〈オペラ序曲集〉

歌劇「偽りの女庭師」序曲 K.196

歌劇「偽りの女庭師」は1774年に作曲された。当時、モーツァルトは18歳。バイエルン選帝侯マクシミリアン3世から謝肉祭用のオペラを依頼され、モーツァルトは父親とともにミュンヘンへと旅立った。作曲者本人が残した手紙によれば、劇場は大入り満員で、アリアが一曲終わるごとに、拍手と賛嘆のどよめきが起こったという。

物語は一種のラブコメ。侯爵令嬢ながら庭師に身分を偽るヒロインのもとに、かつての恋人があらわれて騒動が起きる。軽快な序曲が期待感を煽る。

歌劇「羊飼いの王様」序曲 K.208

「偽りの女庭師」を上演したミュンヘンから故郷ザルツブルクに帰還してすぐの1775年3月、モーツァルトはマクシミリアン・フランツ大公（女帝マリア・テレジアの末の息子）から新作オペラを委嘱された。

台本に選ばれたのはウィーンの宮廷詩人メタスタージョによる「羊飼いの王様」。この台本はモーツァルトがオペラ化する以前から人気が高く、当時の有力作曲家たちがこぞって曲を書いていた。高貴な生まれでありながら羊飼いをする主人公が、王座と羊飼いの恋人との間で葛藤し、最後はまことの愛の力によりハッピーエンドを迎える。

打ち付けるような3回の強奏で開始され、次第にクレッシェンドしながら高揚感をみなぎらせる。後にモーツァルトはこの序曲を交響曲（K.208+K.102）の第1楽章として再利用している。

歌劇「イドメネオ」序曲 K.366

1780年、ザルツブルクのモーツァルトのもとに新作オペラの依頼が舞い込む。依頼主はミュンヘンのバイエルン選帝侯カール・テオドール。台本作家にはジャンバッティスタ・ヴァレスコが選ばれた。当時、ザルツブルク宮廷でオペラを作曲する機会を失っていたモーツァルトは、並々ならぬ意欲をもって、この「イドメネオ」に取り組んだに違いない。従来のオペラ作品よりも格段に表現力に富んだドラマティックな作品が誕生した。

物語の舞台はトロイア戦争後のクレタ島。嵐に遭ったクレタの王イドメネオは、海神に「命を救ってくれたら、陸で最初に会った者を生贄にささげる」と誓う。しかし陸でイドメネオを出迎えたのは息子の王子イダマンテだった……。力強く決然とした序曲が、登場人物の苦悩を予告する。

歌劇「劇場支配人」序曲 K.486

便宜上、オペラと呼ばれているが、この「劇場支配人」はモーツァルト自身の記載によれば「序曲、2つのアリア、1曲の三重唱とヴォードヴィルからなる音楽付きの喜劇」。1786年、皇帝ヨーゼフ2世は祝宴でドイツとイタリアの音楽劇を競演させようと、モーツァルトとサリエリの作品を上演した。ドイツ代表がモーツァルト、イタリア代表がサリエリという、音楽劇における「ドイツ対イタリア」のようなものである。「劇場支配人」の真正な台本は残っていないが、劇団を結成した劇場支配人がオーディションを行う様子が描かれる。

音楽劇としてはすっかり忘れ去れた作品だが、モーツァルトの楽曲そのものは今でもその輝きを失っていない。この序曲はテレビ番組「題名のない音楽会」のテーマ曲にも使用されているので、耳にしたことのある方も多いだろう。

歌劇「フィガロの結婚」序曲 K.492

1786年、ウィーンで名声の絶頂を迎えていたモーツァルトは、オペラ「フィガロの結婚」を書きあげた。原作はボーマルシェ、台本はダ・ポンテ。続く「ドン・ジョヴァンニ」「コジ・ファン・トゥッテ」に並ぶ、いわゆる「ダ・ポンテ三部作」の始まりだ。領主であるアルマヴィーヴァ伯爵が女中スザンナを誘惑するが、スザンナの婚約者であるフィガロの才知によってこれを切り抜ける。一見ラブコメ風でありながらも貴族社会批判をにじませたストーリーを持つ。

創作期の頂点にある作品だけあって、名曲の宝庫といってもよい傑作だが、なかでもこの序曲は小気味よく軽快。単独で演奏される機会も非常に多い。

歌劇「コジ・ファン・トゥッテ」序曲 K.588

「コジ・ファン・トゥッテ」を日本語で表せば「女はみんなこうしたもの」。物語の軸となるのは「恋人たちの交換」だ。ふたりの青年士官は姉妹の恋人を持つ。それぞれいかに恋人が自分に対して貞節であるかを自慢する。そこに老哲学者が「女は必ず心変わりをする」と教え諭し、恋人たちが裏切るかどうかの賭けを提案する。青年たちは自信満々で賭けに乗り、外国人に変装したうえで互いに相手の恋人を口説く。最初は「自分には意中の人がいる」と見向きもしなかった女たちだが、やがて熱烈な口説き文句に耐え切れず、プロポーズを受け入れてしまう……。荒唐無稽な筋書きながら、テーマの現代性と解釈の多様性ゆえか、近年は好んで上演される傾向にある。

序曲は他のダ・ポンテ三部作ほど単独で演奏される機会は多くないが、揺れ動く恋人たちの心を軽やかに示唆する。1790年初演。

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲 K.527

イタリア語で呼べばドン・ジョヴァンニ、スペイン語で呼べばドン・ファン。曲名はプレイボーイの代名詞ともなったスペインの伝説の好色家のことを指している。稀代の女たらしドン・ジョヴァンニは貴族の娘を誘惑し、その父親である騎士長を殺す。騎士長は石像の姿でよみがえり、ドン・ジョヴァンニの晩餐にやってきて改悛を迫る。これを断固として拒むドン・ジョヴァンニは、地獄へと落ちる……。

あらすじからは喜劇的な要素も悲劇的な要素も感じられるが、序曲にも同様のことがいえる。悲劇的な序奏で開始され、次第に緊迫感を高めるが、主部では一転して陽気な音楽がくりひろげられる。陰と陽の対比が鮮やか。